

封神演義 (上)

安能務
訳



ほうしんえん き
封神演義(上)

あ のう つし ゃく
安能 務 訳

© Tsutomu Ano 1988

1988年11月15日第1刷発行

1997年2月14日第26刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-184320-6

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

封神演義 (上)

安能 務 訳

目次

——まえがき——『封神演義』について

安能務 七

第一回 紂王、女媧宮に詣でる

三

第二回 女媧、三妖に密命す

四

第三回 冀州侯、謀叛を起こす

六

第四回 妲己を朝歌に献げる

七

第五回 後宮に妖氣が籠もる

九

第六回 紂王、炮烙を造る

一〇三

第七回 費仲が皇后を陥し入れる

一七

第八回 方弼方相、朝歌に反す

一三六

第九回 商容、九間殿に死す

一五二

- 第一〇回 姫昌、燕山えんさんに雷震子らいしんしを拾う 一六七
- 第一一回 姫昌、姜里じやうりに囚とらわれる 一八三
- 第一二回 陳塘関に哪吒なかく誕生す 一九七
- 第一三回 太乙真人が石磯せうきを焼く 二二三
- 第一四回 哪吒が蓮で化身する 二三〇
- 第一五回 太公望、崑崙こんろんから下山す 二四七
- 第一六回 姜尚じやうしやう（子牙）が琵琶精を焼く 二六八
- 第一七回 姫妃きひが蠶盆たいぼんを造る 二八八
- 第一八回 伯邑考はくゆうこうが納貢して贖罪しよくさいする 三〇六
- 第一九回 散宜生が費尤を買収する 三三二
- 第二〇回 姫昌、逃亡して五関を脱す 三三〇
- 第二一回 姫昌、西岐に帰り「子」を吐く 三四四
- 第二二回 姫妃が妖怪を宴に招く 三五六

第二三回 妲妃、計を設けて比干を害す

三七〇

第二四回 姜子牙、朝歌を離れて磻溪に赴く

三八七

第二五回 聞中、凱旋して十策を奏す

四〇〇

第二六回 姫昌、霊台で飛熊ひしようを夢に見る

四一六

第二七回 姫昌、渭水の辺りで車を曳く

四二九

第二八回 西伯、挙兵し崇候虎を討つ

四四五

第二九回 崇候虎を斬り文王託孤たくこす

四五九

—— まえがき ——
『封神演義』ほうしんえんぎ について

安能 務

「釣り知らず」の太公望

『封神演義』は中国の「三大怪奇小説」の一つである。数世紀にわたって中国の社会で、えんえんと読みがつかれてきた。文字の読めない民衆の間では、講談や芝居で、広く親しまれている。たとえば、日本における「忠臣蔵」のようなものだ。

しかし、なぜか日本人で『封神演義』を知る人は数すくない。主人公は、おなじみの太公望である。だが題名から察しがつくように、それは、魚釣りの秘法を伝える本ではない。

いや秘法どころか、そもそも太公望は、魚釣りの技法すら知らなかった。実は、彼に釣りの技法を教えたのは日本人である。太公望を誰が日本に連れてきたかはわからない。したがって誰が釣りの「技法」を仕込んだかも不明である。ともあれ、太公望は日本に上陸するまで、てんで魚

の釣り方など知らなかった。

似たようなことが「ロボット」について言える。一九六〇年代に、アメリカから日本に輸入されたロボットは、車の造り方など知らなかった。そのロボットに、車造りの「技術」を教えこんだのは日本人である。

そして太公望が、いつしか魚釣りの「名人」となったように、アメリカのロボットも、日本で車造りの名手となった。そのロボットが、こんどはアメリカに逆輸出される。それを見て、アメリカ人は錯覚をおこした。ロボットは、もともと車造りの技術を身につけていた、と勘違いしたのである。

太公望の場合もそうであつた。日本で魚釣りの技術を習得して里帰りした太公望を指して——彼はもともと釣りの名人であつた——と、やはり妙な勘違いをしている中国人が大ぜいいる。

じつさいには、日本で技術研修を受ける前の太公望は、魚釣りの技術どころか、その興味をすら持つてはいなかった。それゆえ、歴史的に中国人は、誰も——例の妙な勘違いをしている人たちは別として——太公望が「釣りキチ」であり、しかも「名人」であつた、などとは思っていない。

「太公釣魚、離水三寸（太公望魚を釣るに、針、水面から離れること三寸）」

という言葉がある。

「そんなこと、まったく興味ないねえ」

という意味だ。そして中国人は、しばしばこの言葉をかけて「言葉遊び」を楽しむ。

——太公釣魚、離水三寸——

と、かけて、

——神不在経スンブーツアイチン（心そこにあらず）——

と解く。そのところは「興味ないねえ」と言うわけだ。しかし、上の句だけを使えば、意味はがらりと変わる。

——太公釣魚（太公望の魚釣り）——

と、だけ言えば、

——不像様ブシヤンヤン（サマにならない）——

つまり、「ヘタクソ！」という意味だ。

さてここで、あるいは、日本の「太公望」と中国の太公望は果たして同一人物だろうか、という疑問が起るかも知れない。

そう言えば終戦後まもなくの東京で、日本の保守政客に友人の多い中国国民党の反共の闘将「谷正綱クライツンカン（こくせいこう）」と、日本の著名な評論家谷正綱たにまさつなが混同されて、珍妙な事件を起こしたことがある。しかし、ここではその心配はなさそうだ。

——釣れますか、などと文王そばに寄り——

という江戸時代の川柳がある。文王が——釣れますか——と声をかけたのであれば、そこで釣り糸を垂れていた男が、のちに文王の軍師となった「太公望」であることは間違いない。文王とは「周の文王」である。つまり日本の太公望は、紛れもなく、中国の太公望とは同一人物だ。

「軍師」太公望

その川柳に詠まれた光景は、中国の古代史を飾る有名な「軍師と帝王の出会い」として、綿々と語り継がれてきたドラマチックな場面である。場所は、いまの陝西省宝鶏県（せんせいほうけい）の南で、渭水（いすい）はその上流の磻溪（ばんけい）であった。

ちなみに、その付近一帯は現在、太公望が三千年前に腰を下ろしていたと称する岩を「目玉」に、観光客で賑わっているとのことである。

ところで、釣れますかと問われた太公望は、——なに、本気で魚を釣っていたわけではない——と正直に答えた。なるほど、見れば釣り針が水面から三寸（？）離れている。

実は太公望が、文王との歴史的な出会いの場を、磻溪の辺りに選んだのには、それなりの魂胆があった。釣り竿は、いわば小道具である。一口に言えば、それは文王に「軍師の尊厳」を示すためであった。

伝統的に中国では、一流の軍師は帝王よりも気位が高い。つまり、太公望は釣りにかこつて、ワラジばきの着流し姿で、文王に会おうとしたのである。

果たして文王が訪ねてきた。文王に会った太公望は釣り竿を手に、魚釣りにかけて「治世」の原則から説きおこす。

——ザコは貧弱なエサにでも食いつく。だが大物は、豊かで香ばしいエサでなければ食いつか

ない。天下は一人の天下にあらず、天下の天下である。政治的な資源（権力や利益）の分配をケチったり、配分を誤まれば天下は取れず、経営することも出来ない——

そして天下の経営をめぐる文王と太公望の政治問答は、しばらくつづく。ちなみに、このとき二人の間に交わされた問答は『史記』にも記録がある。さらには『六韜』に詳しい。『六韜』とは、いわゆる「兵法五書」の一つで、後代の手で整理された「太公望兵法」の書である。なお「虎の巻」という日本語の出典が、実はこの『六韜』にほかならない。

それはともかく、一段と高い岩の上から、文王の問いに答える太公望の「天下経営の学」に、文王は痛く感動し深く共鳴する。そして即座に、太公望を軍師に迎えた。

紀元前は十一世紀初頭のことである。世は「朝歌」（河南省淇県の東北）に都をおく「商（殷）」王朝、第三十一代目の紂王の治下にあった。文王は西岐（陝西省）の領主で、いわゆる四大諸侯の一人である。しかし、天下の形勢はすでに穏やかならず、商王朝はすでに崩壊を兆していた。太公望を軍師に迎えた文王は、たちまちにして声価を高める。が、まもなく世を去った。その後を襲って、息子の武王が立つ。

太公望はその武王を擁して兵を黄河に進め、その渡し場の孟津（河南省孟県の西南）で、天下の諸侯と会盟した。そして牧野（同じく淇県の南）に紂王の軍を破る。紂王は自殺をとげ、ついに六百年の間つづいた商の王朝は崩壊した。

かわって、武王が「周」の王朝を築く。この商王朝と周王朝の交替が世に「商周易姓革命」と呼ばれた。「易姓革命」とは、支配者の「姓」が「易」るだけの革命、という意味である。とも

あれ太公望は、その商周易姓革命の立役者、つまり最大の功労者であった。

「大司祭」太公望

商周の易姓革命は紛れもなく「歴史的な事実」である。しかし史書に記された「史実」が、そのまま「事実」であるわけではない。「史実」とは通常——歴史家が自分で信じ、他人にも信じさせようと願った「事実」にすぎない——と近代の歴史哲学は教えている。

つまり記録された史実が、すなわち「事実」だ、というわけにはいかないのだ。史家が中立である場合ですら、その通りである。ならば伝統的に、史家が儒学の徒である中国では、その儒教的な偏見は避けられない。

中国を儒教国家だと考えるのは哀れな迷信である。儒教は単なる支配階級の思想にすぎず、儒学は伝統的に儒教「広報の学」であった。それゆえ道教的な中国社会の大衆は、そうした史家の手になる「史実」を、そのまま「事実」としては受け入れない。

伝統的な社会で培^{つちか}われたこの種の「拒否反応」には恐るべき牢固さがある。現在でもなお中国の民衆は決して共産党、国民党を問わず、その記録や広報を素直には信じない。

それはそのはずだ。史上最初の史書『春秋』を書いたのは孔子サマである。その偉大な孔子サマすらが『春秋』を書くのに、筆を曲げた。いや、儒教の教義に背^{そむ}く異教徒（彼のいう乱臣賊子）に「筆誅^{ひつちゅう}」を加える、とさえ公言したものである。それゆえ人々は——自分の子供や孫が勉強の

出来る親孝行な子になるように——と孔子廟に詣^{もつ}でることはあっても、孔子サマの歴史的な発言には耳を傾けない。

それに中国の歴史は、これまで、周の王朝に始まると考えられてきた。ならば商周の易姓革命は中国史上「最初の大事事件」である。

そこで人々は儒徒の「史家」と同様に、それぞれの信ずるところに従って、この史上最初の大事件を、道教的な宇宙観で捉え直し「史家」の向こうを張って、道教的な宇宙感情で潤^{じゆん}色^{しよく}し、その神仙思想で脚色した。

文盲の多い中国社会では、人々が歴史を学ぶ手段（メディア）は、講談と演劇である。それゆえ、道教的に潤色され脚色された「歴史」は、当然に講談や芝居の形で世に問われた。

しかし最初は学習者だった聴衆や観客は、いつしか「評論家」となり、そして「歴史」の修正を迫る。その結果「歴史」は「ドラマ」となった。しかも濃厚な神仙思想で染め上げられる。そうしなければ民衆は納得しなかった。

かくて「歴史」は脱線する。しかし、民衆とすれば、それこそが、まさに「歴史」であった。儒教徒と同様に、彼らもまた、その宗教的な信念で歴史を作ったのである。

——歴史とは現実^{しんげん}に何が起こったかではない。何が起きたか、と人々が信ずることだ——
という歴史哲学的な箴言^{しんげん}は、中国人のために用意されたものかも知れない。ここまで来れば、史実と虚構の区別はなくなる。

中国で、高等教育を受けた者までが、ときに、歴史と歴史小説を混同してはばからないのはそ

のためだ。あるいは、大陸を逐^おわれた中華民国が、ずっと台湾に居坐^おったまま、大陸の「正統政府」を主張できたのも、それゆえである。また、二十世紀の後半においてなお——満州人や台湾人も間違いなく黄帝の子孫だ——などと妙な「冗談」を言つて「民族的な団結」を呼びかけることが出来るのもそれゆえだ。

さて、そのようにして道教的に潤色され、脚色された商周易姓革命のドラマが、明代中葉（十六世紀半ばで日本の足利末期）に至り、「小説勃興」の機運に乗つて『商周演義』に集大成された。そして、いつしか『封神演義』と呼ばれるようになる。さらにそれが『封神榜^{ほうしんぼう}』となり『封神演義』とも称された。一つの物語が、さまざまに呼ばれたのは、読者の読みこみかたに、微妙なニュアンスの相違があつたからである。

——どれほど道教的に脚色され、神仙思想で潤色されていようと、物語の骨組みは、紛れもなく、商周革命そのものだ。したがつて、それは間違いなく「歴史」の演義である——
と考える人たちは、かたくなにそれを『商周演義』と呼びつづけた。つまり『商周演義』がいかに怪奇的であろうと、やはり「歴史小説」だ、というのである。

そして逆に——なるほど物語が、歴史を下敷きにしていることは紛れもない。しかし、元来「歴史」は人間の力よりも、大きく「天命」に左右される。ならば、物語の中で活躍する仙人や妖怪こそが、実は歴史を変えた本当の主役ではないか——と考える人たちは、断固としてそれを『封神演義』と称した。つまり、彼らはそれを歴史的な「怪奇小説」と見立てたのである。

しかし他方で、そのような理屈には無頓着な人たちが大ぜいいることは言うまでもない。彼ら

は、ひたすら物語の舞台に登場する人間、仙人、道士、妖怪が入り乱れて、チエや仙術や道法や妖術を競いながら、恐ろしい「寶貝」つまり「秘密兵器」を使って死闘をくり広げる光景に、あるいは息をつめ、あるいは血を沸かせて肉を躍らせる。

それらの人たちは単純にそれを『封神榜』と呼び、あるいは、ややこしく『封神榜演義』と称した。彼らにとって、それは痛快きわまる「空想小説」である。いや「SF」でさえあった。

その通りである。物語で飛び交う秘密兵器に着目すれば、それはまさしく、「空想科学小説」だ。しかもそれは、おそらく世界最初のSFであろう。

中空に舞い上がって敵に襲いかかる「乾坤尺」「金蛟剪」「番天印」「乾坤圈」「定海珠」「降魔杵」「飛刀」「呉鉤劍」などの多彩な誘導兵器は、さまざまな「ミサイル」である。

そして直接的な攻撃能力はないが、あらゆるミサイルを落とす「落宝金錢」は「アンチ・ミサイル」だ。「陰陽鏡」が「殺人光線照射器」なら「照妖鑑」は「X線透視器」で「掌中目」は地下探索も可能な高性能レーダーである。

そして「万里起雲烟」が「ロケット弾」なら「風火輪」は「ロケット推進車」で、すべてを一瞬に灰燼と化す「五火神焰扇」は、さしずめ「原子火焰放射器」であろう。

「菡萏陣」が「機雷」なら「劈面雷」は「手投げ爆弾」で「雷公鞭」は「手投げ爆雷」に匹敵する。

さらに「白光・黄氣」は「催眠ガス」で「吸魂烟」は「神経ガス」であり「頭痛磬」は「神經攪乱音響器」だ。